

琉球大学学術リポジトリ

乳牛の飼養規模と管理の問題

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 太平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21168

は、肥育期間（5～6カ月）、飼料費（7,000～8,000円）は、どのくらいであげるか目標を決め、これを各月に発育予定、飼料給与量などを割当て、この予定目標によって実施する。いわゆる積極養豚を実施すべきと考える。慢然とこれだけの飼料を、これだけの期間与え、これだけの体重の豚になったというような養豚でなく、あくまでも経済的な積極養豚の実施でなければならない。

5 立地条件を生かしての養豚

家畜飼養上必要なことは、その地の立地条件を生かして行なうことである。すなわちその土地の気象条件、生活様式、産業構造、飼料状況など充分考慮して、これらに適する品種、飼養方式、豚舎の構造、あるいは飼料配合などを確立すべきで、徒らに絶対能力を追求する余り、立地条件を忘れてはならない。あくまでも立地条件を考慮した、相対能力追求の経済養豚を確立指導すべきと思う。

乳牛の飼養規模と管理の問題

西 山 太 平（宇都宮大学農学部）

近年乳牛飼養は多頭化の傾向にあり、わが国の乳牛飼養農家は昭和41年36.1万戸、乳牛頭数は131万頭となっているが、1戸当り飼養頭数は35年の2.0頭から41年の3.6頭となり、40年には府県では5～6頭以上の飼養戸数が11%、北海道では10頭以上が9%をしめるに至った。しかし乳牛多頭化にともない種々の問題が起きているが、管理上からみて、畜舎施設、労働力、土地、資本、経営形態、ひいては酪農所得の問題などが派生している。

1 多頭化と牛舎施設

畜舎施設など資本の固定化の大なることは好ましくなく、また建物施設などの騰貴は著しいが、多頭化にともない機械化、省力化ないし生産性向上の立場から投資を迫られている場合が少なくない。まず最小規模として1～2頭飼養の場合は、従来の役畜舎を改造した在来牛舎で足り、労働手段も殆んど人力で大なる支障はなかった。ときには運搬などのため機動車の利用ぐらいで足りた。5頭以上になると、牛舎はスタンション方式とし、農機具施設として電牧、フィードチョツパー、給排水完備、ミルク車機動車を、10頭以上となるとさらにクレーンを備え、20頭段階では場合によってはセミルーズバーン方式の牛舎とし、前記農機具施設を完備し、自由採食、3頭ヘリングボーン式パイプラインクレーン、ストレージなど

、50頭以上ではさらにマニアーロッダー、8頭ヘリングボーン式、パイプラインクレーン、ストレージとするなどして、生産性の向上をはからねばならないが、現状ではそれら牛舎、施設や管理技術の不適合のため、多頭化しても、必ずしもビューヘル(Buicher)の大量生産の法則に従わない場合が少なくない。とくに牛舎については管理作業や環境、とくに防暑の考慮が必要で、従来庇蔭樹、撒・灌水、送風、冷房、涼時放牧、牛舎の構造・形式、飼料の質的改善などが行なわれている。

2 労働力（省力管理）

飼育管理労働費は牛乳生産費中25%内外をしめ、とくに近年労賃の高騰は最も著しい。作業別では飼料調理給与は放牧、給餌回数の減少、給餌の自動、機械化などにより、牛乳運搬は生産乳量の増加により割合省力されているが、しき料搬出入、搾乳、牛乳取扱はまだ飼養規模の過小により、それほど管理労働時間は節減されていない。前記飼養規模別牛舎施設からみて、1～2頭飼いのときは1頭年間777～538時間、5頭飼いのときは276時間、10頭飼いのときは200時間、20頭飼いのときは140時間内外ですむべきであるが、実際はそれぞれ、747～517時間、362時間、326～290時間、279～209時間内外（昭和40年）要しており、さらに適切な牛舎施設、管理技術などが必要である。

3 酪農の経営形態

酪農をいかなる経営形態として行なうべきかは、その地域、農家の経営、生活水準、牛乳消費状況などによって影響されるところが大きい、飼養規模と関連して一応複合経営、専業経営および都市搾乳専業経営などが考えられている。

複合経営の場合は、稲作などの他部門との複合で、数頭の搾乳牛を飼養し、現状では労働時間年1頭当り270時間、同粗飼料1.5～1.8万kg、産乳量5,000kg、飼料作付25a、1頭当り固定投資30万円内外とみて、所得7万円以上を目標とすべきであろう。

専業経営では搾乳牛15頭以上とし、1頭当り年間労働200時間、同粗飼料2～2.2kg、産乳量5,000kg、飼料作付35a、固定投資34万円内外とみて、所得9万円以上を目標とすべきであろう。都市搾乳業経営では1頭当り年間労働250時間、粗飼料7,000kg以上、産乳量5,400kg、飼料作付10～15a、固定投資30万円内外として、所得8万円内外（雇傭労働によれば5万円内外）を目標とすべきであろう。

牛乳生産費調査からみて、わが国では7～9頭、10～14頭飼養規模において生産コストが比較的低下しているが、今後、新結合、新技術、新しい資源、流通機構など技術革新をはかり、多頭化にともなう適正組織、適正規模の管理が必要である。

4 土地、資本その他

なおわが国では乳牛1頭1カ年には粗飼料(生)約1.5～2.2万kg要するとされているが、1頭当り作付面積は27～28aと最近殆んど増加せず、あまつさえ都府県では1～2頭飼いで17a、3～4頭で16a、5～9頭で15a、10頭以上では10aと飼料作付面積は漸減しており、土地問題とくに規模拡大の難かしさを物語っている。

また乳牛1頭当り約30万円内外の固定資本と10万円以上の流動資本を要しているが、多頭化にともない総額では多額にのぼっており、牛乳生産上労賃の高騰についてコストが大であり、畜産金融が大なる問題となっている。なお都市周辺では多頭化にともなうふん尿処理、子牛育成の管理技術も問題となっている。